

(54)

印度學佛教學研究第 60 卷第 1 号 平成 23 年 12 月

## 『サムスクチェンモ』における九住心

青 原 彰 子

0. クンケン・ジャムヤンシェーパ I 世ガワン・ツォンドゥー (kun mkhyen 'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus, 1648–1721) が著した『サムスクチェンモ』(bSam gzugs chen mo, SZCM) は、デプン寺ゴマン学堂の 15 年間の教育カリキュラムの中の「波羅蜜多学」(phar phyin) の副講義 (zul bkol) の教科書 (yig cha) のひとつである。同書は、『現觀莊嚴論』(Abhisamayālaṃkāra) の第一章第 44–45 偈の記述に基づいて、四静慮四無色定を詳説し、根本定を得るための未至定としての止観、未至定としての七作意、根本定、無色定等を論ずる。SZCM が四静慮四無色定を解説するにあたって依拠する文献は、ツォンカパの『ラムリムチェンモ』(Lam rim chen mo, LRCM) 等のチベット典籍、『解深密経』『声聞地』『阿毘達磨集論』などのインド典籍である。SZCM はこれらの文献においては同一の術語が異なった意味で使用されていることに注意を喚起し、学生の四静慮四無色定の理解に混乱をきたすことのないように術語の概念を明確に規定しようとする。本論文は SZCM のこのような試みの例を「止」(zhi gnas, śamatha) に求め、SZCM の僧院教科書としての一端を明らかにする<sup>1)</sup>。

1. 「九住心」に関連する「止」に関して、『声聞地』(ŚBh-III (2) 62.1) と『阿毘達磨集論』(AS 75.15–16) は、(A) 「止は九住心である」と説示し、『解深密経』(GD 106.41a7–b2) と LRCM (321a3–4) は、(B) 「止は第九住心において軽安を伴ったときに獲得される」と説示する。SZCM は、(A) における「止」を「止に相似しているもの」(zhi gnas rjes su mthun pa) とし、(B) における「止」を「止の定義を満たしているもの」(zhi gnas mtshan nyid pa) とする<sup>2)</sup>。

九住心の段階における軽安という定義を満たしていない禅定のことを指して、[それを]「止に相似しているもの」(zhi gnas rjes su mthun pa) と設定し、(後略)。(SZCM 36b3) [X を]「止の定義を満たしているもの」(zhi gnas mtshan nyid pa) と設定するためには、[X が] 軽安を獲得していなければならない<sup>3)</sup>。(SZCM 38b5–6)

SZCM の「止」をめぐる問答記述<sup>4)</sup> は以下のように定式化し得る。

〈命題1〉Xが九住心であるならば、そのXは必ず止である。

〈命題2〉Xが止であるならば、そのXは必ず軽安を獲得している。

〈命題3〉Xが九住心であるならば、そのXは必ず軽安を獲得している。

このうち、〈命題1〉〈命題2〉は正しいが、〈命題3〉は誤りである。〈命題1〉の「止」は「相似しているもの」であり、〈命題2〉の「止」は「定義を満たしているもの」である。このことによって〈命題3〉は成立しないことになり、否定される。

このようにSZCMは、「止」に「相似しているもの」(rjes su mthun pa)と「定義を満たしているもの」(mtshan nyid pa)の二種をたて「止」という術語の指示範囲を区別することによって上記典籍間の異なった記述を整理している。

2. 止と観の修習の順序についての議論においても、このような二種の「止」に基づいて典籍間の記述の相違の整合化が図られる。LRCM (290b3, 290a5-6)は、(C)「止は観に必ず先行する」と説示し、『阿毘達磨集論』(AS 75.21-22)は、(D)「観が先行して止が修習される」と説示する。(D)についてSZCMは以下のように述べている。

前もって如何なる九住心の安住修習をも獲得していないのに、如実・如量について伺察修習をする作意の直接体験が起こっている〔定〕を指して「観を獲得した」と表現し、それによって再度止を獲得するために九住心を培っている〔定〕を指して「観に依拠して止を成就する」と表現する (tha snyad byas pa) からである。(SZCM 52b6-53a2)

(D)における「止」は止に似た九住心であり、「観」は観に似た伺察修習である。これらは「止」と「観」そのものではないので、(D)は(C)となんら矛盾しない。SZCMは次のように述べている。

心を寂靜化するという側面もしくは心一境性の側面から、〔九住心を〕「止」と呼称して (ming btags pa) 説かれているからである。何故ならば、『ラムリム』において以下のように説かれているからである。

(E)「一般的に術語の表現 (tha snyad) を拡張するために、九住心を指して「止」と説かれ、思摂等の四者を指して「観」と説かれることが有りうる。しかし、「止観そのもの」は、後述するように軽安が生じた後に設定されなければならないのである」(SZCM 28b3-6, LRCM 290a6-291b1, LRCN 137b1-2)

この(E)に関連してSZCMは次のように説明する。

(56)

『サムスクチェンモ』における九住心（青 原）

〔止観の前後関係を問題にする場合の〕先行者となっている止・観を指しても、「そのもの」(dngos) と「名称上のもの」(btags) との二つの場合が有り得るのである。(SZCM 108a1-2)

「そのもの」(dngos) は「定義を満たしているもの」, 「名称上のもの」(btags) は「相似しているもの」に相当する。LRCM が「術語の表現を拡張するために」と述べていることに留意すべきである。SZCM が「〔九住心を〕「止」と呼称して」と言うとき、止そのものに相似しているものが転義的に「止」と呼ばれるということが意図されている。「名称上のもの」とは転義的に呼称の付与されたものである。

3. SZCM は、以上の定義充足、相似性とは別の視点からも「止」を捉える。その別の視点とは「分類」(phyogs) の視点である。『解深密経』に次のような一節がある。

(F) 弥勒よ、声聞たち、菩薩たち、そして如来たちの世間と出世間の善法のそのすべてが、止と観の結果であると理解しなければならない。(GD 54a3-5)

SZCM は、この「止」を「止に分類されるもの」(zhi gnas kyi phyogs) とする。

その九〔住心〕などの心一境性以上の禅定は、止に分類されるもの (zhi gnas kyi phyogs)<sup>5)</sup> に含まれるので、それら（その九〔住心〕などの心一境性以上の禅定）の結果もまた、「止の結果」と説明されているからである。(SZCM 28b6-29a1)

重要なのは、この場合の「止に分類されるもの」は、「定義を満たしているもの」と「相似しているもの」の両者を包摂するということである。「九〔住心〕など」の「九〔住心〕」は「止に相応しているもの」であり、「など」によって意図されているもののなかには「定義を満たしているもの」である「止そのもの」が含まれている。SZCM はこの点を次のように述べている。

「相似しているもの」と「定義を満たすもの」の二者に結合しているからである。(SZCM 39a1)

ところでLRCM は、(F) の「止」に関して次のように解説している。

それら（『解深密経』で示す「止」と「観」）は「止」と「観」と表現して名づけた効果である。(LRCM 283a4)

LRCM は (F) の「止」を転義的な「止」と説明するのみである。SZCM は、この「止」を「止に分類されるもの」とすることによって (F) により厳密な解釈を与えている。

4. 以上のように、SZCM には術語の指示範囲の明確化によって、典籍間の記述を整理し、記述の相違を厳密に整合させようとする姿勢が顕著である。それはまさしく SZCM が僧院教科書であることの証である。

- 1) SZCM を扱った研究としては、ガンデン寺の四静慮四無色定の講釈を考察する Zahler [2009] がある。
- 2) なお、「定義を満たしているもの」に関しては、「ある側面からの定義を満たしているもの」というように「ある側面からの定義」(cha bzhaḡ gi mtshan nyid) という概念も導入され、さらなる術語の概念の厳密化が図られる。
- 3) 『偉大なる一切知者尊者ツォンカパ小品全集』(東北蔵外 no.5275, タシルンポ版 Kha) no.72 『ジェ・ラマのギャルワンとの問答』(168b4-5)。
- 4) SZCM の問答記述については拙稿青原 [2011] に詳説した。
- 5) 「止に分類されるもの」という捉え方はすでに『声聞地』の心一境性の論述に見出される。「心一境性は「止に分類されるもの」(śamathapakṣyā zhi gnas kyi phyogs) と「観に分類されるもの」(vipaśyanāpakṣyā lhaḡ mthong gi phyogs) とである」(ŚBhIII (1) 42.9)。

〈略号および使用テキスト・参考文献〉

SZCM 『サムスクチェンモ』 タシキル版全集 na.

LRCM 『ラムリムチェンモ』 東北蔵外 no.5392 タシルンポ版 pa.

LRCN 『ラムリムチュンワ』 東北蔵外 no.5393. Tibetan sDe dge ed.

AS 『阿毘達磨集論・阿毘達磨雜集論』 (Pradhan, ed.), 瑜伽行思想研究会, 2003.

GD 『解深密經』 Tibetan sDe dge ed. 東北 no. 106.

ŚBh 『声聞地』 「瑜伽論声聞地第三瑜伽処」 『大正大学総合佛教研究所年報』 (1) 30, (2008), (2) 31, (2009).

Zahler, Leah 2009 *Study and Practice of Meditation: Tibetan Interpretations of the Concentrations & Formless Absorption*. New York: Snow Lion.

青原彰子 2011 「『サムスクチェンモ』『サムスクチュンワ』における問答記述」 『比較論理学研究』 8: 255-262.

〈キーワード〉 『サムスクチェンモ』, 止観, 九住心, 僧院教科書, yig cha

(広島大学大学院)